

北海道大学総合博物館

ボランティア・ニュース No.14 2009.9.1

特別寄稿

北大名誉教授であり、博物館資料部研究員でもある加藤 誠氏からの寄稿文、「長尾先生」にまつわるお話の第2回です。

ここで、著者である加藤 誠氏(加藤先生)の略歴を紹介しておきたいと思います。

加藤先生は、1932年(昭和7年)3月 鉱山地質技師の長男として宮城県に生まれました。その後、金沢大学に入学、1954年(昭和29年)3月 金沢大学地学科を卒業されました。大学時代の指導教官の関係で北大大学院に入学、1961年(昭和36年)3月 北海道大学大学院理学研究科博士課程地質学鉱物学専攻を中退され、同年6月 北海道大学助手(理学部)となりました。その後、助教授、教授を経て、1995年(平成7年)3月 北海道大学教授を退官、引き続き名誉教授・総合博物館資料部研究員として現在に至っています。

金沢大学卒業直後は、一時期、いわゆるキャリア公務員としての経験をつまれた他、大学院博士課程在学中には、イギリスへ留学もされました。

故湊 正雄教授退官後の後を継ぎ、理学部地質学鉱物学科層位学講座の教授として、ご自身の研究と後進の教育・指導にあたって来られました。先生の研究実績、また研究に対する態度などから、その英才振りを賞賛する人は少なくありません。

古生代サンゴの専門家ということになってはいますが、地質学者(地球科学者)としての先生にとっては、サンゴの研究が最終目的ということではなく、それを切り口として地球成立のロマンを想い、さらにその向こうに、資源開発、防災、環境保全というものを見据えているものと思われます。(文責:安田)

ネスパ?の長尾先生(その2 / 4)

北大名誉教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠

北大に理学部が出来ることになった折、教授候補の一人として、長尾先生に白羽の矢が立ちました。北海道は北九州とならぶ大炭田地域ですから、炭田地質のエキスパートとなった長尾先生のキャリアが、この人選に働いていたのかも知れません。

当時の慣行にしたがって、教授候補者は1~2年海外で研究、視察を行うことになり、長尾先生はフランスに渡りました。そしてパリに落ち着かれました。

新生代の時代区分のひとつにルテシアンというのがあります。これはパリの古名ルテーによっています。シーザー率いるローマ軍がガリヤ(フランスの古名)を征服したとき、ルテーはじめじめとした低湿地で、地名自身がこれを意味しています。パリの盆地

は、古第三紀の地層、化石が良く研究された所で、長尾先生もこれらの研究を大いに参考にされた筈です。ルテシアンの標準地パリに行かれたのは大いに意味のあることでした。決して花のパリにあこがれたわけではなかったことは確かでありましょう。パリには有名なソルボンヌ大学がありますし、古くからの鉱山学校、エコール・ド・ミンがあります。北海道を始めて組織的に地質調査をしたアメリカ人、ベンジャミン・ライマンは、このエコール・ド・ミンに学びました。ジャルダン・ド・プランの端にある巨大な自然史博物館は、博物学者ビュホンの名を冠した通りに面していて、キュビエ、ラマルク、プロニヤール、ドービニーら高名な学者達の古くからの大量の化石コレクションを所蔵しており、長

尾先生が勉強なさるのに、研究場所には事欠かなかった筈です。北大総合博物館の登録化石標本の台帳を見ますと、はじめのところに、フランスをはじめとする欧州産化石が多く記されていますが、これは長尾先生が、古生物学の授業用、比較研究用に、フランスの標本商から化石を購入なさったからであります。ちなみに東大や京大の地質教室の標本はドイツの標本商から購入したものでした。

パリの長尾先生の所には、立ち寄ってお世話になった人も少なくなかったようです。美食家とは思われない長尾先生も、エスカルゴ(カタツムリ料理)を召し上がったそうですが、これはお客さんへのおもてなしの一環だったのででしょう。

1929年4月27と28日の2日間、当時ヨーロッパに滞在中だった北大理学部教授候補者がパリに集まって会議を開きました。主に理学部の規定や、予算について話し合われたのですが、後世パリ会議と称されているものがこれです。参加者は13人、後の東大総長となった茅誠司、北大学長杉野目晴貞、雪の研究の中谷宇吉郎、地質学鉱物学科からは、後に学士院会員となった鈴木醇、原田準平、長尾巧が参加しています。会議はリュクサンブール公園近くのレストランで行われたそうですが、このとき公園で撮った集合写真が残っています。数学の功力金二郎氏はパリ在住でしたが、病気で、この会には出られませんでした。会議のお世話は、パリの長尾先生がなさったもので、このとき、先生は、もうすでにかなりフランス語がお出来になっていたようです。



1929年4月27、28日フランス国パリにおいて理学部新設に関する準備会議が開かれ、欧中の教授候補者13名出席

パリ会議時の記念写真(北大理学部50年史から)

交渉は、長尾先生の連発するネスパ？でスムーズに進んだのでした。ネスパ？はフランス語の会話では、しきりに使われる言い回しで「そうじゃありませんか？　そうですよね？」などに当たる言葉です。英語ならイズンティット？、ドイツ語ですとニヒトバーといった言い方が相当しますが、日本語の「……、ね」という言い回しが雰囲気的に正にネスパ？に相当しそうです。ネスパ？がスムーズな会話を助けていたからには、長尾先生のフランス語は、なかなか大したものだったに違いありません。ネスパ？

----- つづく -----

会員の活動紹介

憧れの博物館ボランティア

大学受験を終え、はじめて北大博物館を訪れた2008年2月。それ以来、気がつけば私はすっかり博物館の虜になっていました。北海道の歴史、北大の歴史を知ることができ、様々な研究テーマの展示が見られるところ、そして歴史ある建物の雰囲気、館内の空気が大好きです。大学に入学してから1年目の間、暇を見つけては博物館へ行き、あの空間を楽しんでいました。

ある日、いつものように博物館へ行き、掲示板を眺めていた私の目に飛び込んできたのが、ポスターに書かれた“博物館ボランティア募集”の文字。「大好きな

図書ボランティア 柏谷美也子

博物館で、博物館に関わる仕事ができるなんて！」そのことがきっかけでボランティアに参加しようと決意し、2年生に進級した今年の4月から、念願の博物館ボランティアを始めることになりました。いくつかあるボランティアの中から私が選んだのは、図書室業務です。このボランティアの要項を見るまで、私は博物館に図書室があることすらまったく知りませんでした。全くの未知の場所である博物館の図書室で、博物館の支えとなる仕事をしようと思い、このボランティアを選びました。図書室は、正面玄関から入ってすぐの階段を上って中二階、女子トイレの奥のところにひっそりと

在ります。一般の方がなかなか入ることのないその空間には様々な分野の本や雑誌が所せましと並べてあり、その一角で図書ボランティアが行われています。



図書ボランティアの方々

お手伝いの主な内容は、図書室の整備・維持の作業です。今行っている作業は、日本全国の博物館や資料館から送られてくるニュースレターやパンフレットの整理、図書室にある雑誌類の整理です。時間はかかりますが、なかなかやりがいのある作業で、おおいに楽しみながら行っています。この他にも、図書の修復や貸出作業など、図書に関わる様々な作業が行われ、図書室の整備・維持活動をしています。現在図書室業務は天野先生、小野先生のご指導の下、8名のボランティアで行われています。ボランティアに関するだけでなく、いろいろなお話をしながら、本当に楽しく参加させていただいております。大好きな博物館でボランティアができる喜びを、いつまでも忘れず胸に抱き、これからもボランティアを続けていきたいと思っています。

2009 年度、第 1 回ボランティア講座 & 交流会

6月14日(日)午後、博物館主催の今年度第1回のボランティア講座 & 交流会があり、参加しましたのでご報告します。

今回は、高橋英樹先生とご一緒にキャンパスの植物を巡るプログラムでした。以下に見学会の様子の概略をお伝えします。

当日は雨天でしたが、13 時総合博物館入り口に集合し、博物館から古川講堂、弓道場、そして大野池までの植物を解説していただきました。

博物館正面のイチイの説明から始まりました。地形が植物の分布に影響を与えること、葉の特徴そして人間生活への利用方法など具体的に説明いただきました。

北大構内の大木の9割を占めるハルニレ、その管理の難しさ。中央道路の博物館と向き合う位置にあるクロビイタヤ発見のいきさつ。そしてクラーク像の台座の正面に掲げられたオオオニバス (*Victoria regia*) とそれにまつわるクラーク先生のお話。また、古川講堂の前の林学の学生のために植えられたシナノキとオオバボダイジュについてもお話がありました。

2009 年度、第 1 回談話会の報告 事務局

今年度の第1回談話会を開催しました。7月31日、N302 室に総合博物館資料研究員の諏訪正明名誉教授をお迎えし、「ハエのはなし」の演題でお話いただきました。16時から約1時間ほど先生のお話があり、その後、ビールを飲みながらの質疑応答、談話となりました。約20名の参加者があり、楽しく、にぎやかな会となりました。

植物・図書ボランティア 星野フサ

サクシュコトニ川の橋の上からはキハダの大木を見下ろしました。附属図書館前にはヨーロッパクロマツがあります。ここから下に降りていくと左手の湿ったところに生育しているのはハンノキ、北米産ネグンドカエデ、中国産シンジュ、しだれている大木は自生のシロヤナギなどの説明もありました。

弓道場横の川辺にある花の色がピンクのヨーロッパ原産のヒメフウロ。そして大野池の奥には絶滅危惧種のミクリ、池に浮かぶスイレン等々、盛りだくさんのプログラムでした。

参加者は、9つのボランティアグループから12名でした。配られた高橋先生ほか編集の改訂版「北大エコキャンパス読本(2005)」はとても役に立ちました。

全国版新聞紙上のアンケートで日本一に選ばれた自然豊かな北大キャンパス、博物館を訪れた方々だけでなく、多くの方にご紹介していきたいと改めて思いました。

最後の交流会では、参加した皆様から日頃の活動や今後の予定の発言があり、和やかなひとときとなりました。

この会合は博物館の同じ部屋 (N302 ボランティア室) を使用している北大留学生の皆様が、どのようないきさつで日本にこられることになったのかとか日本で楽しく勉学に励んでいる様子などを尋ねてみたいということで、ボランティアの会の有志が開催しました。

7月21日の午後、1時間という短い時間でしたが女性3名、男性4名の合計7名の北大留学生と、こちらからは沼田と星野が参加しました。

司会役の沼田さんの英語圏では26文字で文章が構成され、日本では50文字に漢字が入って文章が構成され、韓国も異なる文字構成になっていることによる文化の違いが与える影響はどのようなものか興味を持っているという呼びかけから会合ははじまりました。

この博物館3階のN302の部屋がボランティア室となるまでの北大の先生方のご協力から現在の使用状況ま

で話はひろがりました。日本語が非常に堪能な韓国からの留学生、呉 明熙さんのご協力で有意義な交流会となりました。

世界中にはたくさんの行ってみたい国があるのにもかかわらず、日本を選んで来日されたことは母国の指導教員の推薦、親切にしてくれた日本人の存在など様々な理由によって実現したことが分かりました。彼らはこの部屋を夜の時間帯に使用することが多く、また一方、日本人ボランティアは主に昼の時間帯に使用しています。お互いにこのN302室を拠点として、いろいろな形で社会貢献をしている姿がこの交流会を催すことによって理解が進みました。

参加された皆様ありがとうございました。今回用事があった方々も、このような会合が開催されるときはどうぞ御参加ください。

編集部から

前館長の藤田氏から、ボランティアの皆さんおよびニュース編集部に対し、次のような感謝の言葉をいただきました。ここに全文を掲載して皆様にお知らせするとともに、これからの活動の励みとしたいと思います。

皆さんの努力に感謝します

博物館の裏方を熱心に続けてくださるボランティアの方々には頭が下がります。私も何人かの方にこうしたシステムがあることを紹介してボランティアになっていただきました。ボランティアの方々が、生き甲斐を感じつつ献身的な努力をされていることに、館長を務めたものとしては感謝の念に堪えません。

さて、博物館ボランティア・ニュースも14号を迎えるとのこと。私が館長のとき、『発行するなら長続きしてください』と言ったらしいのですが、事務局の皆さんの協力をえて、ついにここまで継続してこられました。継続は力なりと言いますが、ここまで継続させるには相当

北大名誉教授・北大総合博物館前館長 藤田 正一

の努力が必要だったはずですが、そしてボランティア・ニュースも力を得ました。ここまで続くと、せっかく継続しているものを途切れさせてはいけないという意識が生まれます。楽しみに読んでくださる方も増えます。ボランティア活動の貴重な記録にもなります。だんだん重要性が増してくるのです。これこそ継続の力です。

思えば大学博物館も、先人の研究の継続のマイルストーンを研究し、保管し、展示する場ですね。皆さんのこれまでの努力に感謝し、これからも継続していただくことが皆様の喜びでもあるように念じております。



談話会での諏訪先生
(3ページ関連記事)

ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac>

ボランティア・ニュース

編集・発行

北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者: 星野、沼田、安田、永山)

発行日: 2009年9月1日

連絡先

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目